

牛の博物館
郷土の企画展



目次

口絵	1
北上川の要衝	
蛇の鼻と箱石	3
なぜ蛇行している？	4
白鳥館の変遷	
白鳥館のはじまり 縄文・弥生時代	5
古代の集落 平安時代10～11世紀	6
生産と流通 平安時代末～中世12世紀	9
＜平泉の手工業生産＞	11
＜周辺との交流＞	13
流通の拠点 中世13～14世紀	14
城館 中世15世紀	15
集落 中世末～近世16～17世紀	17
中世以来の信仰	19
白鳥館の生業	
川と生きる	21
前沢牛生産のさきがけ	23

— 中世の川湊から城館、そして現在 —
白鳥館のすべて





白鳥館遺跡 13次調査区
北上川の川縁に遺跡が立地しています。



白鳥館の位置図



かわらけ窯 12世紀 白鳥館遺跡9・10SF200



白鳥館周辺の地質図 経済企画庁(1960) 表層地質図水沢



磁電窯産盤 白鳥館遺跡出土
13世紀 中国産の陶器の盤です。



銅塊 白鳥館遺跡出土
12世紀 銅が熔解したものです。



蛇の鼻を構成する輝緑岩



砥石 白鳥館遺跡出土
14世紀 絵が線刻されています。



かわらけ 白鳥館遺跡出土
14世紀末～15世紀前半



提子金具 白鳥館遺跡出土
12世紀



水晶製数珠玉 母珠
白鳥館遺跡出土 12世紀

白鳥館遺跡から出土した水晶製の数珠玉。T字形に穴が開いていることから、母珠と判別できます。電子顕微鏡による観察の結果、横穴は丁寧に磨かれているのに対し、縦穴は穿孔したままであることから、横穴を磨いている途中で破損した未成品であることが判明しました。白鳥館遺跡では熔解した銅の塊も出土していますが、かわらけや鉄のみならず銅や石の加工も行われていたことを示す貴重な資料です。

ごあいさつ

牛の博物館から望むことができる国指定史跡^{しろとりたて}白鳥館遺跡。奥州藤原氏が築いた都市「平泉」中心部から3.7kmの北上川のほとりに位置しています。12世紀の外国産陶磁器や国産陶器などが平泉中心部に次ぐ密度で出土していることから流通の重要拠点とされ、また、舟運を担う川湊^{かわみなと}であったと見られています。

白鳥館には、弥生時代にはすでに人が住んでおり、以後、集落、工房群、城館など役割を変えて利用され、人が生活する里の環境が古くから維持されてきました。本企画展では、浄土の都市「平泉」を支えた白鳥館遺跡出土の考古資料、さらに漁労、畜産など白鳥館で営まれてきた生業を紹介し、過去から現在にいたる歴史を解説します。おぼろげながらも、発掘調査で分かってきた白鳥館の役割を、地元をはじめ多くの方に知っていただき、世界遺産「平泉－仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群－」の拡張登録への後押しとなることを祈っております。

本展示を開催するにあたり、地元白鳥館の住民の皆さま、関係機関のご協力をいただきました。皆さまに感謝申し上げます。

平成31年3月

奥州市牛の博物館
館長 鈴木 啓 一

北上川の要衝

蛇の鼻と箱石

■舟運の目印

白鳥館から北上川に突き出した岩体は「蛇の鼻」と呼ばれ、河畔にそそり立つ岸壁の姿は、目を引く景勝地でもありました。近世には、盛岡－石巻間の輸送を担うひらた舟が行き来しましたが、流れが急で岩の露出する白鳥館周辺は難破舟や死者も出る難所とされてきました。昭和30年代から40年代にかけて行われた碎石の採取のため、蛇の鼻の先端部は削られ、現在のような姿になりました。

白鳥館の東、北上川の中央部に「箱石」という四角い岩が水面に顔を出しています。戦後、箱石の上に畳を敷いて、その上で神楽が奉納されたと古老が記憶しています。日照りが続いた時期、対岸の長島から神楽衆が来て、雨が降るように祈禱を行ったのです。

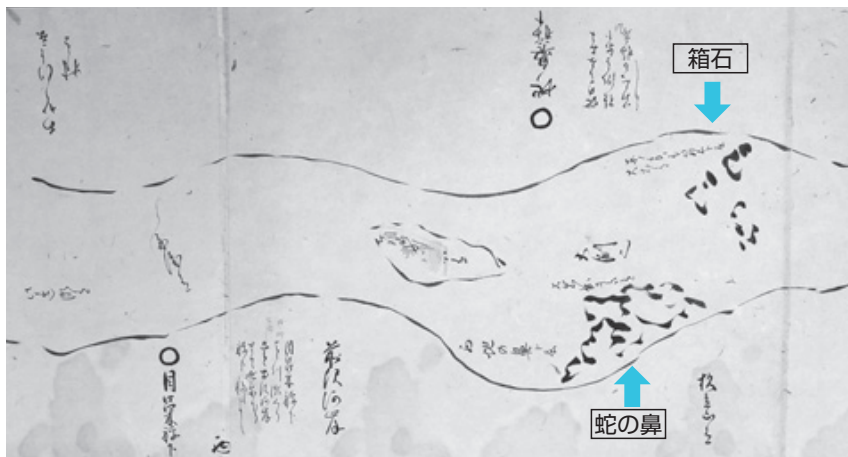


箱石

北上川の水位が下がると顔を出します。左手奥が白鳥館、右手が平泉町長島、その先は東稲山です。箱石から東稲山の方へ同じ岩体が列状に続いています。



昭和30年代の蛇の鼻 白鳥神社写真提供
もともとは北上川の川縁まで岩壁がそそり立っていました。



北上川絵図（部分） 宝暦2年（1762） 北上市立中央図書館所蔵
嘉左エ門が伊達藩の命により、北上川航路を実際に見分して作成しました。蛇の鼻と箱石が、航行の際に注意すべき場所として記載されています。左が上流。

■中生代の硬い岩

白鳥館周辺の地質図（口絵参照）を見ると、北上川の流路を新生代完新世（1万年前～）の堆積層が

占めている中、半深成岩の輝緑岩（紫色表示）で構成された蛇の鼻と箱石だけが島状に浮き上がっています。東稲山山頂付近にも輝緑岩が分布しており、これは、中生代白亜紀（1億4500万年～6600万年前）にできたブナ峠火山岩類の一部です。白鳥館の対岸には、輝緑岩と、その熱による接触変成作用を受けた粘板岩の脈があり、堆積岩の中にマグマが貫入して輝緑岩が生成したことが分かります。蛇の鼻と箱石は、東稲山周辺の地中で形成された輝緑岩の端にあたり、のちに北上川の流路がこれらの上を通った際に、硬い岩体であるために削られずに残ったと考えられます。



現在の蛇の鼻

蛇の鼻の先端が削られて無くなっています。

なぜ蛇行している？

■地質学的要因

現在の北上川は白鳥館周辺で大きく蛇行し、流れも急になっています。西岸には胆沢扇状地の土野原段丘、東岸には北上山地のブナ峠火山岩がせまっており、川幅が狭められています。

また、硬い輝緑岩でできた蛇の鼻がこれらの間に位置しており、川は蛇の鼻をよけて大きく蛇行しています。さらに、箱石をはじめとした小さな輝緑岩の岩が川の中に点在し、渦を作り出して川の流れを複雑にしています。

■流路の変遷

現在、白鳥館の北西で北上川は大きく蛇行していますが、元禄12年（1699）の地図では、白鳥館の東を直流するように描かれています。天保11年（1840）に前沢村と赤生津村境に新しい川を掘削し、河道の切り替えを実施したものの、13年後の嘉永6年（1853）には施工の不備と洪水で蛇行した河道に戻ったといえます。

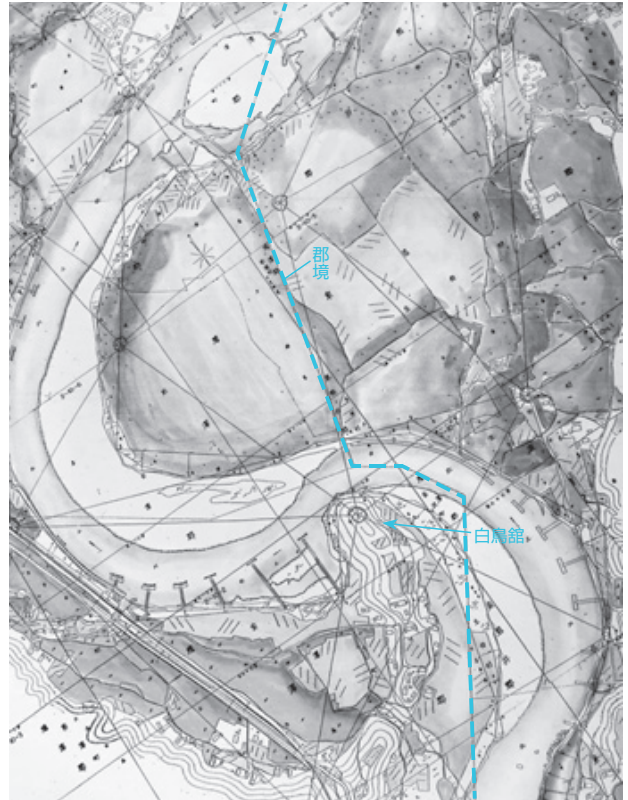
このことから、北上川は天保11年（1840）よりも前、おおむね18世紀前半に、洪水などによって自然に蛇行して現在に近い形に固定していたと考えられます。



下胆沢大絵図（部分） 元禄12年（1699）

個人所蔵

この時点では、白鳥館周辺での川の蛇行がありません。



北上川河川台帳（部分） 明治37年（1904）

個人所蔵

現在と同様、川は大きく蛇行しています。ただ、郡境は川が蛇行する前の流路にそって引かれています。

白鳥館の変遷

白鳥館のはじまり 縄文・弥生時代

■人が住み始めた頃

白鳥館を人々が利用し始めたのは、およそ4000年前の縄文時代後期に遡ります。縄文時代後期は土器がわずかに出土するのですが、縄文時代晩期になると、丘陵先端の北上川に面するところで、まとまった量の遺物が出土します。ただし、遺物が広がる範囲は小さく、住居跡も確認できないので、漁労などのために一時的に滞在するような場所だったようです。

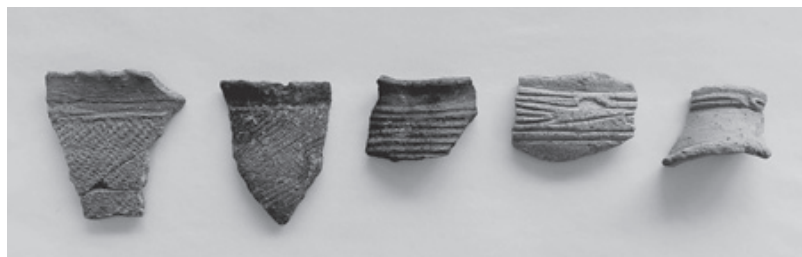
弥生時代後期の遺物は、主に低地から出土します。低地では、溝跡と推定される遺構も見つかっていることから、白鳥館ではこの頃に人々が居住を始めたと考えられます。

奥州市周辺で弥生時代後期の遺跡が見つかること自体、大変珍しいことです。白鳥館遺跡の対岸にある平泉町の里遺跡でも、白鳥館遺跡と同じ弥生時代後期の遺物が出土しています。

白鳥館遺跡の人々は、すでに弥生時代から、北上川を渡って対岸との往来をしていたのかもしれません。



縄文時代、弥生時代の遺物出土地点
●縄文、▲弥生。弥生時代に低地の利用が活発になっている様子わかります。



縄文土器 白鳥館遺跡3次調査出土

縄文時代晩期の土器。丘陵東部からまとまって出土しています。

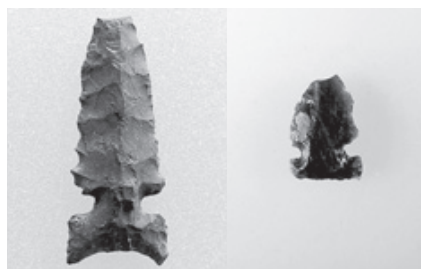


弥生土器 白鳥館遺跡12～14次調査出土

弥生時代後期の土器。対岸に所在する平泉町里遺跡でも同時期の弥生土器が出土しています。

弥生土器 白鳥館遺跡12S K 263出土

高さ29cm。弥生時代後期の土器で、口縁部付近から底まで復元できる例としては、奥州市内の出土品では唯一のものです。



アメリカ式石鏃 白鳥館遺跡11～12次調査出土

東北地方の弥生時代後期の石鏃。名称はアメリカ先住民の鏃と形が似ていることに由来します。長さ(左)2.8cm、(右)1.4cm。

古代の集落 平安時代 10～11世紀

■集落の形成

陸奥国胆沢の地に胆沢城が創建されて、およそ50年が過ぎた頃、白鳥館に集落が営まれ始めます。丘陵の斜面では、中世の城館の整地層の下から、竪穴住居跡が見つっています。竪穴住居跡からは、漁網の錘として使われた土製の錘が出土していることから、北上川で網を利用した川漁を行っていたことが窺い知れます。

また、低地の川縁では、鍛冶を行っていた竪穴住居跡が見つっています。竪穴住居跡の中央には炉跡があり、炉跡の周辺から鍛造剥片^{たんぞう}といわれる鉄を鍛えたときに飛び散る小さな鉄片が出土しています。周囲には、炭窯と考えられる遺構が点在しているので、木炭も調達していたと思われます。

これらの遺構から、白鳥館では、すでに古代の段階から、鉄の加工が行われていたことがわかります。



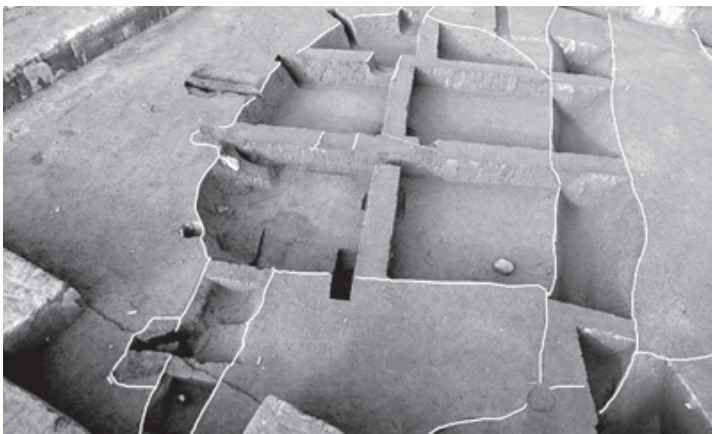
3SI100竪穴住居跡 白鳥館遺跡

土錘が出土した丘陵斜面の竪穴住居跡。丸で囲ったところは竈の跡です。



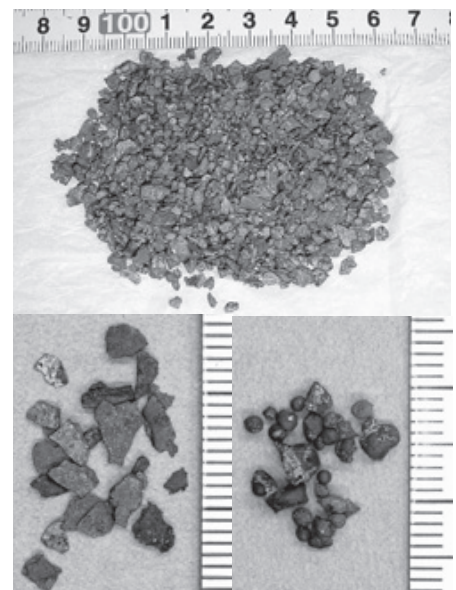
土錘 白鳥館遺跡3SI100出土

丘陵斜面の3SI-100竪穴住居から出土した土錘。こうした錘を網にたくさん付けて漁に使用したと考えられます。



14SI43竪穴住居跡 白鳥館遺跡

鍛冶が行われていた竪穴住居跡。床の中央に直径30cmほどの炉跡がありました。竈は南から西へ作り変えられています。



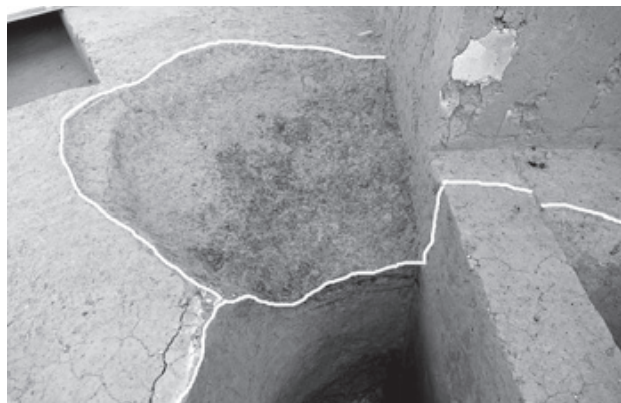
鍛造剥片・湯玉 白鳥館遺跡14SI43出土

鍛冶が行われていた竪穴住居跡から出土したもので、下左が鍛造剥片、下右は玉状に溶けた鉄である湯玉です。



土師器坏 白鳥館遺跡14SI43出土

鍛冶が行われた竪穴住居跡から出土した土器。竈の掛け口に伏せられていました。直径14.1cm。



14SK76炭窯状遺構 白鳥館遺跡

鍛冶が行われた竪穴住居跡の付近にあった炭窯と考えられる遺構です。長さ1.5mの楕円形の穴で、中には炭が堆積しています。写真手前部分は中世の井戸跡で壊されています。

■交通の要衝として

白鳥館が所在する「白鳥」の名称は、10世紀ごろの書物である『和名類聚抄』と『延喜式』にすでに登場します。

『和名類聚抄』には、胆沢郡5郷のうちの一つとして「白鳥」が見え、『延喜式』には、「白鳥駅」が置かれたことが記されています。「駅家」とは、地方と中央の間の情報を伝達するために伝馬を常備する国の施設で、当時の主要道路に置けました。

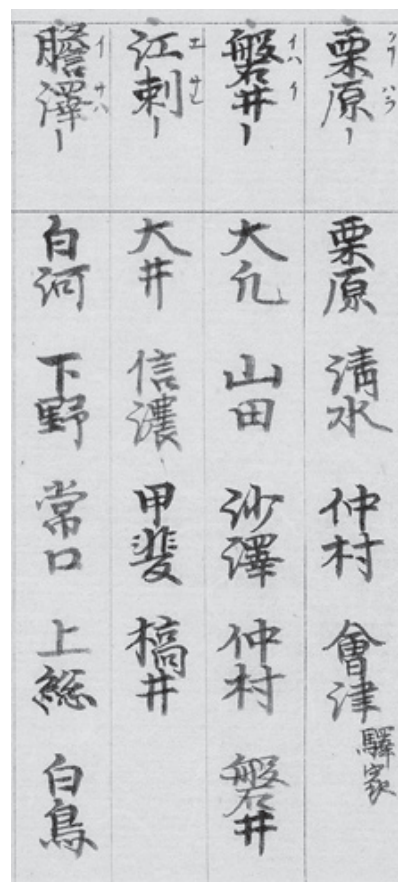
これらの記述から、「白鳥」は、胆沢郡を5分するほどの大きさの村であり、胆沢城から多賀城、やがては都に通じる「東山道」が通っていたことがわかります。

この後、約100年後の11世紀の記録にも「白鳥」が現れます。安倍

氏と源氏・清原氏連合軍が戦った前九年合戦の顛末を記した「陸奥話記」には、衣川関を破った源氏の軍が「白鳥村」に入ったことが見えます。また、清原氏の内紛に始まる後三年合戦では、後の奥州藤原氏初代となる清衡が、兄である清原真衡の館を襲う道すがら白鳥村在家400戸を焼き払ったと記されます。

これらの記録から、前九年・後三年合戦の頃の白鳥館周辺は「白鳥村」という、街道沿いに400戸もの家がある村であったことが知られます。

以上のことから、「白鳥」は平泉の時代を遡ること、200年ほど前の時代から、すでに交通の要衝地であったといえるでしょう。



和名類聚抄

名古屋市博物館所蔵・写真提供
平安時代中期に編纂された辞書です。
胆沢の項の一番下に「白鳥」の郷名がみえます。

■ 11世紀の白鳥館

江戸時代の記録では安倍貞任の弟「白鳥八郎則任」しろとりはちろうのりとうの居所とされる白鳥館ですが、遺跡の丘陵部からは11世紀後半の土器が出土しています。小片であるものの、まとまった量があることから、何らかの土地利用があったことが推定されますが、11世紀の遺構面は、中世に城館を築いた際の大規模な造成によって失われたり、深く埋もれてしまっているため、11世紀にどのような遺構があったのかは、今のところわかっていません。



11世紀の土器 白鳥館遺跡2～3次調査出土

上は丘陵北端の畑から採集されたほぼ完形の小皿です。直径8.4cm。11世紀後半。下は丘陵東部の中世城館の造成土の下から出土した大皿と小皿の破片です。いずれも11世紀後半。

一方、東北地方の11世紀の城については、近年、その様相が明らかになってきています。秋田県横手市の「大鳥井山遺跡」は、丘陵全体に堀や柵を巡らせた後三年合戦に関わる砦の跡と考えられています。白鳥館も大鳥井山遺跡とよく似た地形であり、このような砦として使われた可能性もあります。



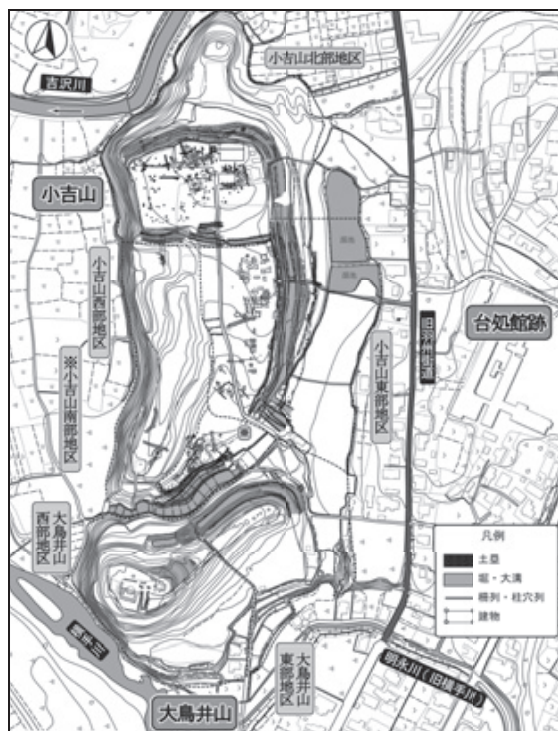
衣関遺跡 SI9出土土器

白鳥館遺跡の南西約1kmにある衣関遺跡の竪穴住居跡から出土した11世紀初頭の土器です。この頃に、白鳥館の近くに集落があったことを示す資料です。



大鳥井山遺跡 二重の堀と土塁

横手市教育委員会写真提供



大鳥井山遺跡 遺構全体図

横手市教育委員会写真提供

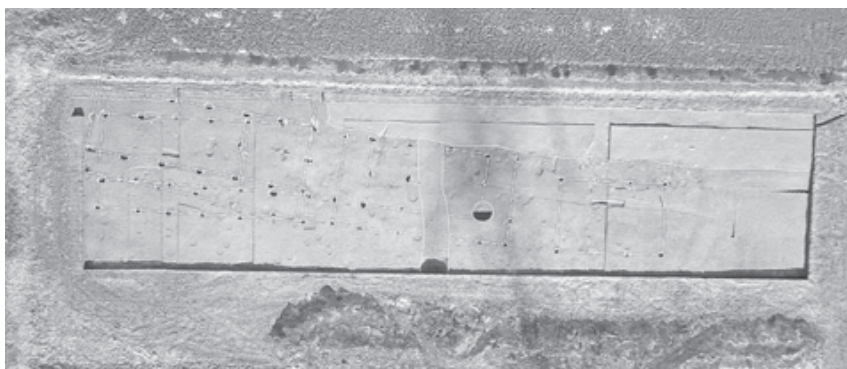
生産と流通 平安時代末～中世 12世紀

■川湊の開設

白鳥館が本格的に使われ始めたのは、12世紀、奥州藤原氏初代清衡によって平泉の建設が始まって少し経った頃です。白鳥館の低地の中央に建物が建てられます。建物跡は12世紀を通じて次々と建て替えられており、連続して利用されていたことが窺えます。白鳥館は北と南に船着き場の適地を擁していたことに加え、対岸との渡河点でもあったことから、平泉の北の川湊として使われたとみられます。やがて平泉に毛越寺が完成するころには、「かわらけ（素焼きの酒杯）」の生産や鉄の精錬、銅や石の加工などの手工業生産の機能が加わっていきます。現代でいうならさしずめ流通工業団地といったところでしょうか。

12世紀の流路復元図

12世紀の北上川は、今のように西に大きく蛇行しておらず、白鳥館遺跡に向かってほぼまっすぐ流れ、遺跡の北端で白鳥川と合流していたと推定されます。遺跡の南には、北上川によって形成された沼があり、どちらも船の停泊には好条件の場所でした。これに加え、遺跡の東の川底の岩礁による難破を避けるため、荷を揚げ下ろしすることもできました。



白鳥館遺跡8次調査掘立柱建物跡

左端の東西棟の建物跡が12世紀の白鳥館遺跡で最初に建てられたと考えられる建物跡です。左端の建物は、方位をずらして同じ形状の建物に建て替えられています。建物の平面形態も平泉中心部では例の少ない形です。

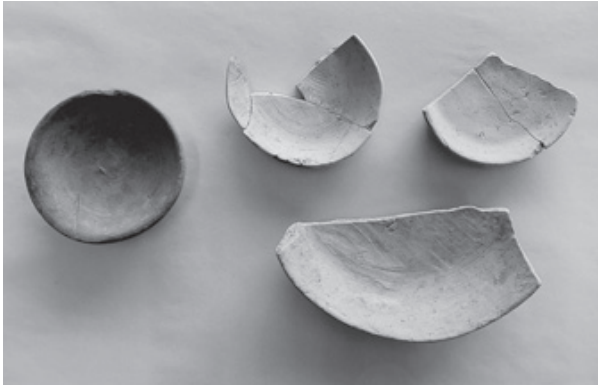


白鳥館遺跡9・10次調査区

8次調査区の西隣りでは、建物跡や手工業生産遺構が見つかっています。

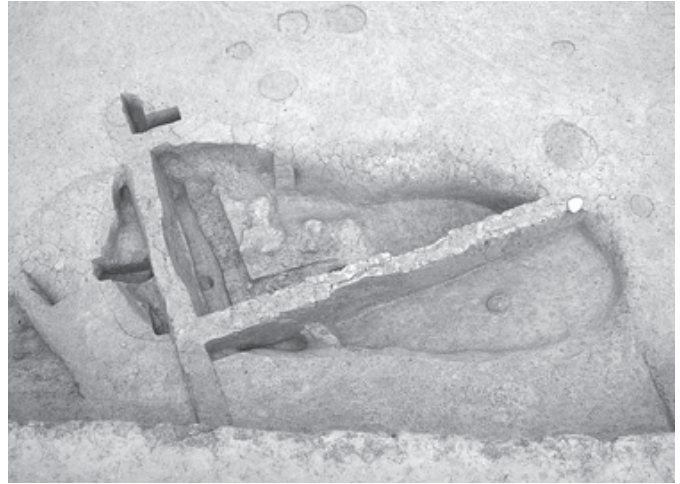
中央の南北棟の建物跡は奥州藤原氏三代藤原秀衡の頃から鎌倉時代初め頃まで使われたと推定される建物跡です。面積約140㎡と遺跡では一番大きな建物です。

建物跡の西側には、かわらけ窯跡や鍛冶炉跡、井戸跡、小屋風の建物など、手工業生産に関わる遺構が広がっています。



かわらけ窯跡出土かわらけ 白鳥館遺跡出土

左上の1点はロクロかわらけで、窯跡が廃絶する時に埋納されたと考えられるものです。それ以外は、手づくねかわらけで、かわらけ窯が埋まる過程で廃棄されたものです。ロクロかわらけ直径8cm。

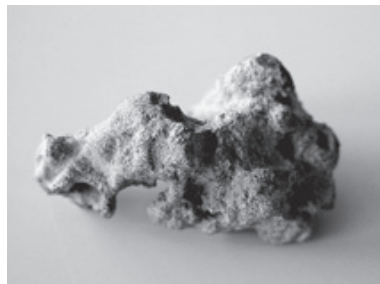


9・10SH200かわらけ窯跡 白鳥館遺跡

かわらけを焼いた窯跡。長さ約2m。遺跡の南、沼付近では粘土を採掘した穴も見つっています。生産されたかわらけは平泉に供給されました。



ひさげ 提子金具 白鳥館遺跡出土
銅製提子の釣手金具。長さ4.3cm。提子は酒を盃に注ぐヤカン状の容器です。



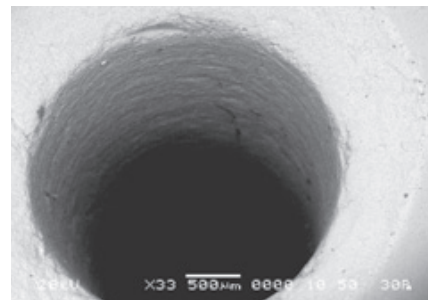
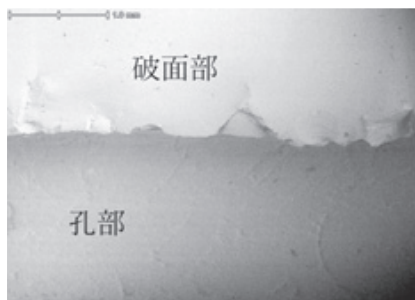
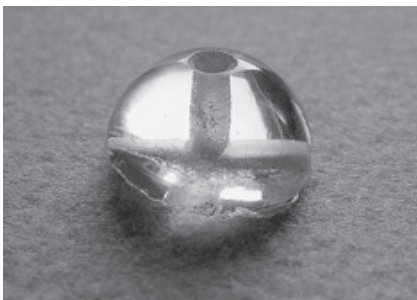
銅塊 白鳥館遺跡9次調査出土

長さ2.9cmの熔解した銅。当時、銅は貴重品であるため再利用されることが多く、このような出土例は珍しいです。



鉄塊・鉄滓^{てっさい} 白鳥館遺跡11・13次調査出土

右2点は熔解した鉄の塊を切断したもの、左は鉄を溶かしたときに生じた滓を切断したものです。外見では見分けが付きませんが、断面をみると、鉄塊は内部には鉄が残っており、鉄滓は内部に鉄分が残っていません。



水晶製数珠玉及び穴部分の顕微鏡写真 白鳥館遺跡9次調査出土

直径2cmの水晶製の数珠玉。T字の穴から母珠とわかります。横の穴は平滑に磨かれている（写真中央）のに対し、縦の穴にはらせん状の痕が残っている（写真右）ことから、横穴を磨いている途中で割れた未成品であることがわかります。

＜平泉の手工業生産＞

■陶器・瓦・鉄・銅

平泉では、その建設当初から最新技術を積極的に導入して手工業品を生産していたことが近年の調査で明らかになっています。花立山で発見された「花立窯」の調査では、東海地方で生まれたばかりの技術が導入されて平泉で陶器生産が試みられたことが明らかとなり、平泉の手工業生産について、これまでの常識を覆すこととなりました。

平泉中心部では、陶器以外にも、瓦窯跡、かわらけ窯跡などの遺構のほか、銅製品や鉄製品、漆製品の生産に関する多彩な遺物が出土しています。



1号埋納るつぼ（重要文化財）

平泉町志羅山遺跡出土

平泉町教育委員会蔵・写真提供
銅を熔解するときに用いられた「るつぼ」で金も付着しています。平泉駅前周辺からは、るつぼや銅板屑など、銅加工に関わる遺物が多数出土しています。直径14cm。



銅板屑 平泉町志羅山遺跡出土

平泉町教育委員会蔵

銅板を加工したときに出た屑。金が付着しているものもあります。



焼成粘土塊 平泉町志羅山遺跡出土

平泉町教育委員会蔵

志羅山遺跡から出土したかわらけを製作した際の屑とみられる粘土塊で、この周辺にかわらけ窯があった可能性を示すものです。同じ遺構から出土した手づくねかわらけは、手づくねかわらけが平泉へ導入された直後の12世紀中葉のものです。



六器鋳型（重要文化財）

平泉町志羅山遺跡出土

平泉町教育委員会蔵・写真提供
仏具である六器の鋳型。このほかにも周辺では花瓶や鏡の鋳型などが出土しています。

陶器甕

平泉町花立窯跡出土

平泉町教育委員会蔵・写真提供

平泉町字花立の花立窯跡から出土した陶器の甕です。

平泉では、最新技術を導入して花立窯を作り、陶器生産が試みられましたが、製品として完成することはなく、平泉での陶器生産は中止されたとみられています。12世紀初頭。

■手工業生産地の変遷

これら平泉の手工業生産に関する遺構や遺物は、花立山の麓から毛越寺通りの周辺で多く見つっています。そのため、これまでは12世紀の平泉は毛越寺から東西に延びる通り沿いに手工業者が軒を並べて居住する都市といったイメージが想定されてきました。しかし、周辺の遺構の変遷を整理すると、これらの手工業遺跡は、毛

越寺が完成したころには、すでに機能していなかったようです。中心部から離れた白鳥館遺跡や里遺跡などでは、この時期から手工業生産が開始されます。これは平泉中心部が都市化するに伴い、手工業地が郊外へ移転した結果と考えられ、特に白鳥館遺跡は川湊であったことから、これらの機能が付加されたと推定されます。



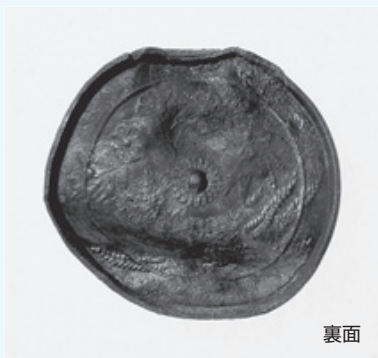
瓦 平泉町鈴沢瓦窯跡出土

平泉町教育委員会蔵
花立山の麓にある鈴沢瓦窯の周辺から出土した瓦です。瓦も12世紀前半から平泉で作られていることが、最近の研究で指摘されています。

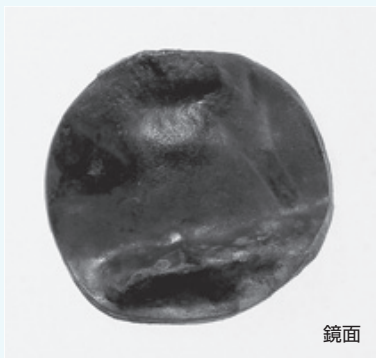


羽口 平泉町無量光院跡出土

平泉町教育委員会蔵・写真提供
無量光院が建てられる前の整地層からは、鉄を溶かすときに使う羽口や鉄滓など鉄加工に関わるものが出土しています。



裏面



鏡面



裏面



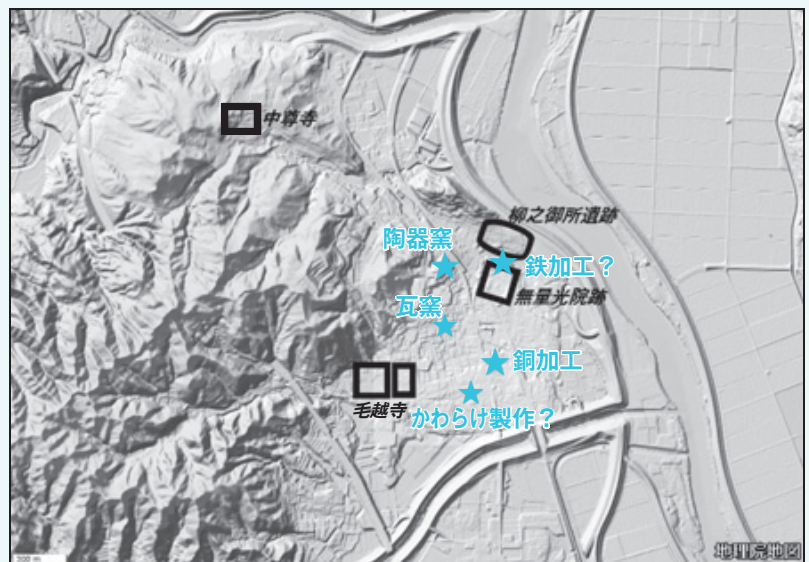
鏡面

和鏡（重要文化財） 平泉町里遺跡出土

平泉町教育委員会蔵・写真提供
白鳥館遺跡対岸に所在する里遺跡から出土した和鏡。上は平泉で生産された鏡です。平泉での鏡生産は12世紀中葉から始まったとされています。上：直径11.8cm。

平泉町内の生産遺跡位置図

★が生産遺跡。花立山と高館山、平泉駅にかけての範囲で生産遺跡が見つっています。毛越寺や無量光院が完成する頃には、これらの遺跡は無くなっているようです。



<周辺との交流>

■北上川舟運

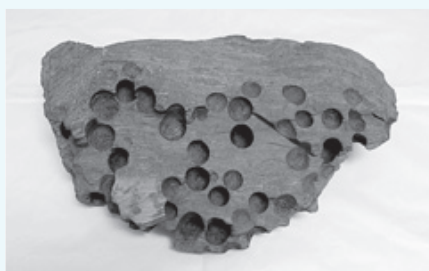
中世の白鳥館は北上川の川湊として栄えましたが、「平泉」が都市として成立するためには、北上川の舟運が不可欠でした。

当時、重いものや大きなものを運ぶためには、舟で運ぶしか方法がありませんでした。舟運により平泉に運ばれたと考えられるものの一つに、愛知県で焼かれた高さ90cmにもなる大甕おおかめがあります。このほか、毛越寺の景石に使われている海岸産の石なども船で運ばれたと考えられます。また、文献には、毛越寺の本尊が京都で作られたことが記されていますが、本尊は高さ2.4mにもなる丈六仏だったと考えられることから、やはり舟で運搬されてきたのでしょう。

■対岸の聖地

白鳥館の対岸、平泉町字月館地内に所在する月館大師堂には、12世紀の石仏が祀られています。お堂の境内には、石仏のほか、12世紀の宝塔や13世紀の板碑が残されています。さらに、大師堂の西約150mの北上川を見下ろす川縁には12世紀の経塚や宝塔もあり、中世にはこの一帯が聖地となっていたことがわかります。

白鳥館が湊や生産地として機能していた中世、北上川の対岸は仏に守られた聖なる場所であり、湊と聖地が対置するところだったのです。



貝の巣穴がある石

岩手県教育委員会蔵
柳之御所遺跡から出土した貝の巣穴がある粘板岩。海に生息する貝の巣穴であることから、沿岸から運ばれた石と考えられています。毛越寺庭園の景石には同様の大きな石が用いられています。幅約30cm。



常滑産大甕

平泉町教育委員会蔵・写真提供
一番大きな甕は愛知県常滑で焼かれた大甕で、高さは90cmもあります。



平泉町月館大師堂 大師像

平泉町長島字月館
近年の調査で12世紀前半に製作された石像であることが判明しました。天台大師または伝教大師の像と推定されています。12世紀の石像は全国でも非常に珍しいそうです。像高103.3m。



平泉町月館大師堂 宝塔

平泉町長島字月館
大師堂境内にある平泉型宝塔といわれる宝塔。12世紀。



平泉町月館大師堂 板碑

平泉町長島字月館
大師堂境内にある永仁2年(1294) 銘の板碑。

流通の拠点 中世 13～14世紀

■新たな有力者のもと

1189年、源頼朝によって奥州藤原氏は滅亡、鎌倉御家人による支配が始まります。平泉の政庁であった柳之御所遺跡は焼失したあとと再建されませんでした。白鳥館は変わることなく湊や生産地として機能し続けます。

鎌倉時代の始めは、12世紀と同じ場所に拠点を置きますが、鎌倉時代の後半には、拠点が川縁へと移動します。ここからは、威信を示すものとして鎌倉御家人に好まれた中国産の盤が出土していることから、鎌倉時代になっても白鳥館には有力者が関与し経営がなされていたことが窺えます。



白鳥館遺跡12次調査区

両側に側溝を持つ道路跡。路面幅は1.4～2.6m。写真奥の林の先は、まもなく北上川です。



じ そうようさんばん

磁甎窯産盤 白鳥館遺跡13次調査出土
中国南部で焼かれた直径20cm以上の盤（大皿）。鎌倉では多く出土しますが、東北地方ではあまり例がありません。



13SK45方形竪穴遺構 白鳥館遺跡
川縁で見つかった倉庫と考えられている遺構です。1.7×1.3m。柱穴は深くてしっかりしています。

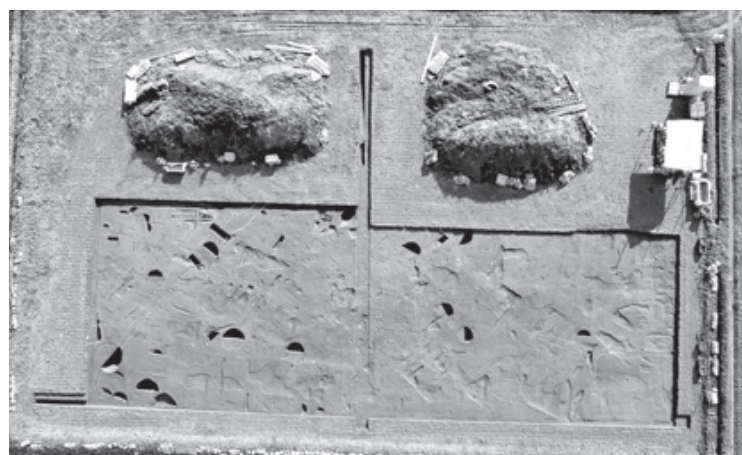
■有力者の館

南北朝時代に入る14世紀前半頃、遺跡の中心は低地の中央に移ります。この時期の遺跡は、溝で方形に囲まれた区画の中に建物や井戸などが配置されるもので、有力者の館であったと考えられます。付近からは製鉄炉の炉壁などが出土していることから、鍛冶も継続して行われていたことがわかります。



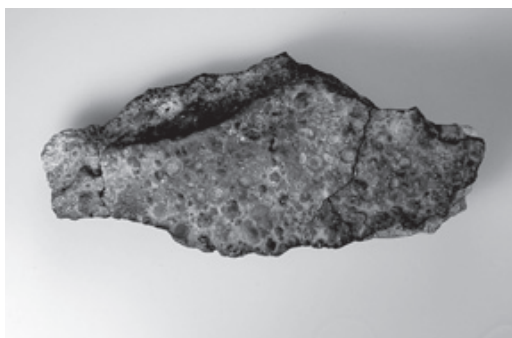
中心部の変遷

●12世紀、▲13世紀、■14世紀と中心部が転々と移動しています。



白鳥館遺跡12次調査区（写真上が南）

一辺28m以上の溝跡で方形に区画されています。区画の内部には、多数の建物跡や井戸跡がありました。



製鉄炉の炉壁

白鳥館遺跡12SH145出土

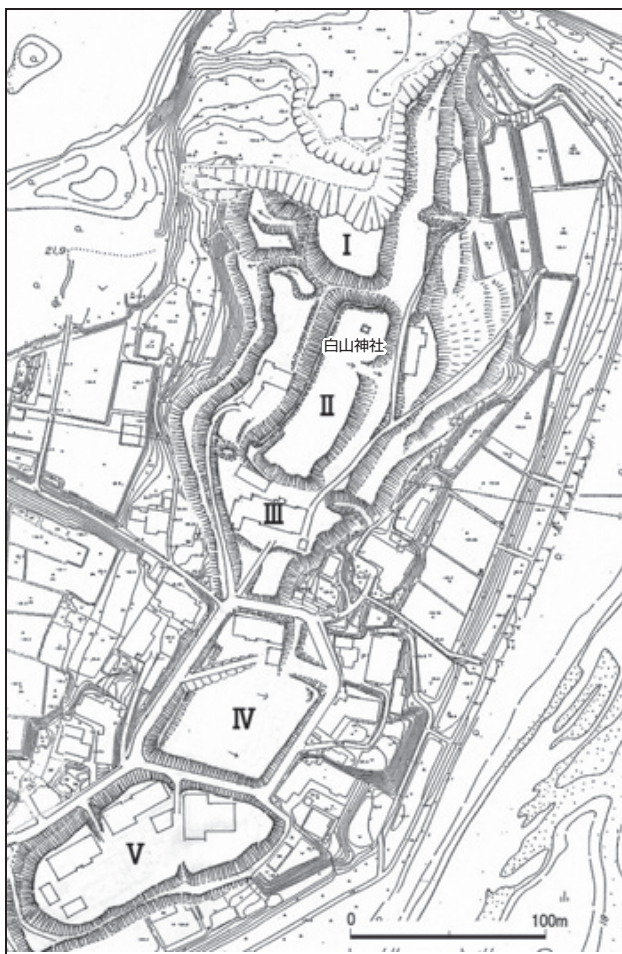
砂鉄から鉄を作るときに使う直径1m以上にもなる製鉄炉の炉壁。白鳥館遺跡では砂鉄から鉄を作る作業は行われていませんので、鉄山から持ち込まれたと考えられます。幅24.5cm。

城館 中世 15世紀

■中世の城として

14世紀の終わり、室町時代を迎える頃には、白鳥館の丘陵に中世城館が築かれます。その一方で低地に広がっていた遺構は減少し、丘陵の麓以外には見られなくなっていきます。これは、白鳥館の低地の遺構群が、丘陵部へと移転したためと考えられ、流通拠点の機能を維持したまま、丘陵へ本拠地を移して中世城館を築いたとみられます。

城館は、14世紀終わり頃に築かれた後、15世紀に現在のような姿に改修されています。15世紀の改修では、丘陵を大きく造成して階段状の地形を作り出しているため、城館初期の姿はあまりよくわかっていません。



白鳥館遺跡縄張図

室野秀文氏作図

I が本丸、II が二の丸、III が三の丸と呼ばれるところです。I は北側2/3が失われています。現在 II にある白山神社は、昭和30年代まで本丸の北端にありました。



白鳥館遺跡 堀跡

I（本丸地区）とII（二の丸地区）を区画する堀跡です。現在は埋没していますがI、IIとも周囲には堀跡がめぐっていました。



白鳥館遺跡 堀跡

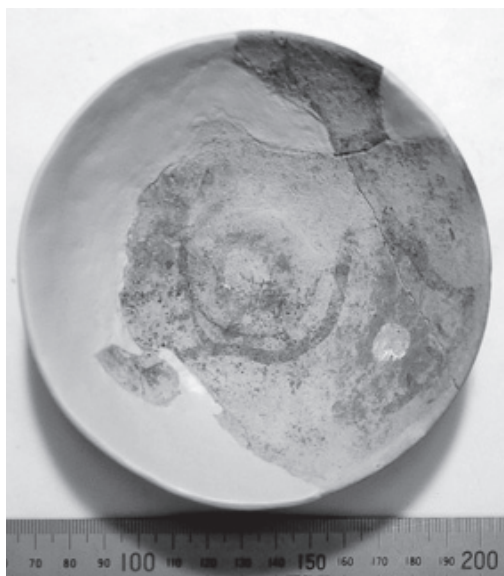
I（本丸地区）東の一段下がった平場で、写真奥の林が本丸地区です。城館を造成した時の盛り土が、人の頭の上まで堆積しています。

■城の構造

15世紀に改修された城館は、南北に延びる丘陵を堀で大きく3つに区画されており、北から順に本丸、二の丸、三の丸と俗称されています。伝二の丸地区では発掘調査などにより建物跡や土塁、入り口などが確認されますが、伝本丸地区の遺構はまばらです。このことから当時の主たる居住の場は、伝二の丸地区であったと考えられます。伝本丸地区については、かつて白山神社が鎮座していたことを考慮すると、聖地の空間であり、これを取り込んで城館が作られた可能性があります。



陶磁器 白鳥館遺跡2・3次調査出土
中国産の茶碗や、愛知県瀬戸で焼かれた壺や天目茶碗などが出土しています。14世紀～15世紀(右下の染付皿は16世紀末)

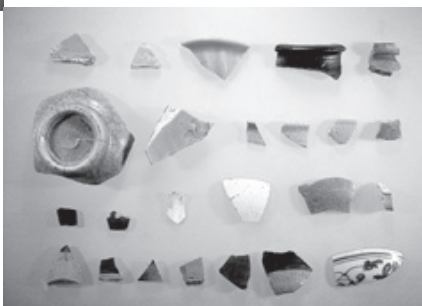


花の絵が描かれたかわらけ 白鳥館遺跡6SD1出土

伝二の丸地区入口の堀跡から見つかったかわらけの大皿。表裏に同じ花の絵が描かれています。赤で6弁の花弁、白で花房、黒で茎が表現されていますが、何の花を描いたかは不明です。

彩色された絵が描かれたかわらけは、全国でも非常に珍しいものです。直径12.8cm。14世紀末～15世紀前半。

信楽産壺 白鳥館遺跡6・7SD10出土
伝二の丸地区の入口跡から見つかった滋賀県信楽で焼かれた茶壺。白鳥館には「チャバタケ」という屋号がありますが、中世には茶を栽培していたのでしょうか。



■「白鳥館」の名前

東北地方では、城館のことを館(たて)と呼称する例が多くあります。現在、遺跡名としても用いている「白鳥館」の名称は、築城後に生まれた名前と想定され、城館ができる前には別の名前であった可能性があります。慶長5年(1600)に葛西氏領の北上川の舟場と舟数を記した文書は、「舟とめの日記」という文書ですので、当時、川湊は「とめ」と呼ばれていた可能性があります。白鳥館の西には「衣関(きぬとめ)」という字名がありますから、川湊の時代、白鳥館は「衣関」と呼ばれる湊だったのかもしれません。

■解説 ■ 白鳥館の城主は？

白鳥館の城主については、中世の文献史料がほぼ残っていないため、はっきりとしたことはわかっていません。唯一城主名がわかるのは、16世紀初期の葛西一族等奉加帳にみえる「白鳥 前飛驒守重時」です。彼は白鳥館及び周辺地域を領した一族の当主とみられ、当時葛西一族で広く用いられていた「重」の通字を用いていることから、葛西氏の分流であったと推定されます。

奥州合戦の結果、胆沢郡は葛西氏に与えられ、一族が多く定住します。近世の記録に白鳥館城主として名前のみえる白鳥氏も、その中で白鳥に所領を得た葛西一族の子孫だったのでしょうか。(奥州市教育委員会 高橋和孝)

集落 中世末～近世 16～17世紀

■村として－現在の礎－

北上川の湊や生産地、さらには城館として中世を通じて繁栄した白鳥館ですが、15世紀後半には、城館としての役割を終えてしまいます。まさに戦国の世を迎えようとするこの時期に城館が廃された理由は、北上川中下流域を治めていた葛西氏により領国の一円支配が進められるなかで北上川の権限が掌握され、湊も再編されたことが想定されます。これにより白鳥館はその機能を失ったと考えられます。

廃城から16世紀末までの約100年間は人々の生活の痕跡がほとんど見られなかった白鳥館ですが、江戸時代を迎える16世紀終わり頃には人々が戻ってきます。元禄12年の絵図には丘の麓に3軒の家が描かれています。地区に残る最も古い墓石も元禄時代ですので、この頃には現在に続く白鳥館の旧家が始まったのでしょう。



さし銭 白鳥館遺跡3SK85出土

16世紀頃の墓跡から出土した銭。紐は腐って失われていますが、穴に紐を通していた状態で出土しました。出土枚数は143枚、中国で鑄造された永楽通宝が含まれています。



下胆沢大絵図 白鳥館部分

元禄12年（1699）個人所蔵

北上川が今のように曲がる前の様子。白鳥館の麓から低地の間に、3軒の家が描かれています。



白鳥村繪圖面（部分）文政6年（1823）

村境を確認するための絵図です。白鳥館に水田や屋敷が見られます。右が北。

■河道の変動－洪水来襲－

低地では16世紀末ごろを境に生活の跡が全く見られなくなります。代わりに堆積するのは、砂の層。厚いところでは1m以上も堆積するこの層は、洪水により運ばれた土砂が堆積したものです。古代や中世にはこうした層は見られませんので、白鳥館が現在のような洪水の常襲地帯になったのは江戸時代以降と推定されます。元禄12年（1699）の絵図では真っ直ぐだった川筋が、現在のように大きく蛇行したことが、白鳥館に洪水をもたらす要因になったと考えられます。

■刀鍛冶の伝承と 鍛冶の守り神の信仰

白鳥館の三宝荒神社の別当家は「カジヤ」という屋号と呼ばれ、刀鍛冶にまつわる伝承が伝わっています。かつて、先祖が城主に刀を納めるよう命じられたが完成せず困っていたところに、狐の化身である刀鍛冶の達人が現れ、刀の制作を手伝って向こう槌を打ちました。「サンジョウコカツ（三条小鍛冶）の名刀」が完成し、城主に献上すると、そこで達人は消えたといわれています。三条小鍛冶宗近とは京の名刀工で、平泉に足を運び舞草鍛冶にも影響したと伝えられ、刀鍛冶の伝承や昔話によく登場します。

三宝荒神は火の神、竈の神とされ、鋳物師や鍛冶師の信仰を集めています。狐も鍛冶との関係が深く、「おいなり様」は全国的に鍛冶師の仕事場で祀られます。

また、かつて、別当家では、獣・鳥を調理することが禁じられていました。三宝荒神は竈の神であるため、竈で生き物を調理してはいけないとされていたためです。



三宝荒神と刀鍛冶の図 個人所蔵
白鳥館の三宝荒神社の中に祀られています。別当家の伝承の一場面が描かれ、右の向こう槌の人物の頭上に狐の姿が見えます。箱ふいご、金床など、鍛冶で使う道具が具体的に描かれています。室内には他に、三宝荒神の図、紫波稻荷の神札がかけられています。



三宝荒神の図 個人所蔵
別当家から出た最初の分家に保管されているものです。箱ふいごによる加熱、鍛錬、研磨など、刀鍛冶の工程が詳細に描かれています。

■解説■ 鍛冶神の掛け図

かつて岩手の鍛冶職は「鍛冶神さまのお掛け図」と呼ばれる掛け軸を作業場などに祀った。多くは、神仏習合から生まれた火の神・三宝荒神が箱ふいごなどの上に立ち、荒神の使いである鬼と職人たちが加熱した鋼を鎚で打って鍛えたり、研いだりする様子を描いている（荒神系）。まれに能「小鍛冶」の題材になった伝説にある、稲荷神の使いである狐の精が相鎚を打つ場面を描くものもあった（稲荷系）。白鳥館の旧家に伝わる上掲の「三宝荒神の図」は荒神系、「三宝荒神と刀鍛冶の図」は稲荷系の掛け図である。三宝荒神の図は筆致や内容からみて江戸初期以前のものとみられ、怪獣のような鬼たちがユーモラスなできばえだ。他方、三宝荒神と刀鍛冶の図は荒神と狐の精を一緒に描いている点が、管見の及ぶ限りだが非常に珍しい。

鍛冶職たちは必ず年頭の仕事始めと旧暦11月の「ふいご祭」に、掛け図に料理を盛ったお膳を供え家族らと一緒に祈りを捧げた。鍛冶は製品の出来が火に左右され、非常に危険を伴う仕事だったため、神仏への信仰が篤かったのだ。（陸中護符研究会 宮本升平）

中世以来の信仰

■白鳥館の氏神

白鳥館には白山神社、熊野神社、三宝荒神社の3つの神社があります。いずれも白鳥館内にある旧家の氏神で、毎年9月にそれぞれ親族が集まって祭礼を行い、五穀豊穡と家内安全を祈ります。

祭礼では、屋敷の床の間に天照皇大神の掛け軸をかけ、その前に米や御神酒などの献饌^{けんせん}を供えて清める修祓^{しゅばつ}の儀を行った後、行列を組んで、ほら貝、太鼓に先導されて神社へ向かいます。献饌の儀、祝詞奏上^{のりと}、玉串奉納^{たまぐし}など祭礼で行うことは3社共通していますが、神社に供えられる供物がそれぞれ異なっています。例えば、白山神社では、川魚なら頭を向って左向きに、海の魚なら右向きにと配置が決まっています。三宝荒神社では、火の神がいる竈で動物を調理することを禁じており、魚の代わりに、油揚げとこんにゃくを供えます。



天照皇大神の掛け軸の前に献饌を供える



太鼓とほら貝



修祓の儀で献饌を清める



行列を組んで神社まで献饌を運ぶ 熊野神社



献饌 三宝荒神社 左から、菓子、こんにゃく、米、御神酒、野菜（ネギ）、油揚げ

■白山神社、熊野神社

白山信仰、熊野信仰は、奥州藤原氏の時代に平泉に入ってきたとされる信仰です。11世紀から12世紀は、本地垂迹説により神々が仏と結び付いて体系化され、神道が成立した時期でした。これらは全国へ広まり、都市平泉においても重要な地位を占めるにいたります。

白山信仰は、福井県、石川県、岐阜県にまたがる白山を対象とする山岳信仰です。養老元年（717）に開山とされ、平安時代から南北朝時代にかけて勢力を拡大して全国に広がっていきます。平泉では、文治5年（1189）、三代秀衡の時代、中尊寺の南北と平泉の東方に日吉神社、白山神社の両社が勧請されたと『吾妻鏡』にあります。



白山神社

本殿は18世紀の建築とされます。蛇の鼻が掘削される前は本丸に位置していましたが、昭和30年頃に現在の二の丸に移されました。堂内には、鏡と神像が祀られています。

白山神社
白山鎮座
白山神社祈禱神符

熊野信仰は、和歌山県の熊野三山を信仰するものです。熊野本宮を訪れると、極楽往生が遂げられるとされ、平安時代末期には浄土思想の広まりも相まって熊野信仰が全国へ広がります。白山神社と同じ文治5年（1189）、紀州熊野本宮に由来する今熊野社を平泉の北方鎮守として勧請しました。

白鳥館の白山神社、熊野神社も、平泉の流通拠点として使われていたことと関係があって、ここに勧請されたのかもしれません。



熊野神社

元々、屋敷の西の低地に位置していました。50年ほど前に現在の本家屋敷内に移されました。

熊野大神
白鳥鎮座
熊野大神祈禱神符

■三宝荒神社

山岳信仰に由来する白山神社、熊野神社に対して、三宝荒神社はいわゆる火の神を祀る民間信仰の色合いが強いものです。三宝とは、仏、法、僧を指しますが、典拠となる経典はなく、仏教、道教、陰陽道、神道などの神々が合わさって生まれた神です。荒神は、祟りやすい性質を持つ故に、肉食禁止などの禁忌を守って、鎮め祀ることで福をもたらしようになるとされています。近世・近代を通じて、修験者などによる竈払いの儀礼が行われ、民衆の間で荒神信仰が広く流布しました。白鳥館の三宝荒神社の別当家に刀鍛冶の伝承が残ることからも、中世の鍛冶産業に由来する信仰と見られます。



三宝荒神社

昭和17年の寄進者名が堂内に書かれており、その頃に現在のお堂が建築されたと見られます。ズブズドウ（持仏堂）と呼ばれる木の箱に、三宝荒神と刀鍛冶の図などが祀られています。

三宝荒神
白鳥鎮座
三宝荒神祈禱神符

白鳥館の生業

川と生きる

■川漁師の営み

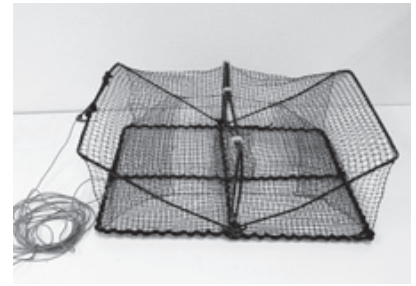
江戸時代の伊達藩領内の北上川では主にサケ、マス、アユが、舟を用いた網漁で獲られていました。各村で許可された漁師が舟の規模や漁の方法に応じた税を納めて漁を行っていました。戦後、北上川での漁獲量は落ちましたが、川の清流化対策や稚魚の放流により昭和50年代より再び、サケ、マスが遡上するようになりました。

白鳥館がある鵜ノ本地区でも、専門の川漁師が30年代までは活躍しており、白鳥館でも、アユ、ウナギ、モクズガニなどを獲って生計を立てていました。獲れた魚はかつて前沢にあった料亭などに出されていました。

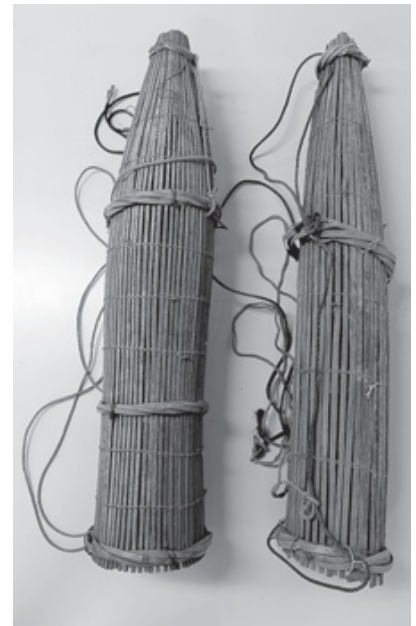
■北上川の恵み

海の魚が手に入りにくかった昭和30年代頃までは、さまざまな川魚を獲ってタンパク源としてきました。

地元でウグイを「クキ」と呼び、5月頃に遡上してくるクキを白鳥館の住民総出で獲ったといいます。北上川の対岸から対岸までワイヤーを張って5隻ほどの舟を川の中に固定します。釣り竿に餌のない針をたくさんつけたガラカケという道具で、魚を引っ掛けて釣りました。クキは焼いて魚臭さを取り、味噌味で煮込んで食べました。また、ニゴイもガラカケでたくさん獲れたので、燻製にして、うどんの出汁を取るなどに使いました。



カニ用の罟



うなぎ用の罟



川舟 へりがとがっておらず、舟底が平たいのが特徴です。

北上川の渡し 昭和30年代

『水沢・江刺・胆沢の100年』より
昭和30年頃まで、白鳥館から対岸の赤生津へ舟での渡しが行われていました。
川の対岸に見えるのが束稲山。



■現在のざっととり

現在、専門の漁師はいませんが、家庭で食べる魚を獲っている人はいます。主要な魚種はアユです。9月～10月にかけて、産卵のために川を下る落ち鮎をねらって、餌のないガラカケで漁をします。川舟で流れが速いところへ行き、餌のない針を魚の体に引っ掛けて釣ります。モクズガニは、昭和初期には針にイカの身をつけて釣っていましたが、カニの数が減った現在は籠型の罟を使用します。漁期は9月中旬からで、渦の巻いている場所に仕掛けるのがコツだといわれています。ウナギは、「胴」と呼ばれる罟にミミズなどの餌を入れて、深いところに仕掛けておきます。

■洪水の歴史

北上川は、周辺の地域に頻繁に水害を引き起こしてきました。江戸時代の間でも213回が記録されており、明治以降1960年までの93年間での洪水は116回にも上りました。

昭和22年、23年（1947、1948）のカスリン、アイオン台風では、北上川周辺に甚大な浸水、家屋流出被害をもたらし、カスリン台風では前沢の大曲橋が流失しまし

た。当時の氾濫で、白鳥館の集落も低地の家は軒まで水に浸かるなどの被害がありました。鶉ノ木地区との間をつなぐ道路が浸水して白鳥館が島状に孤立し、3～4日間、白鳥館から外に出られなかったといえます。幸い、長年の川との付き合いの経験から、住民は高台の家に身を寄せ、死者は出ませんでした。



台風による大洪水 昭和23年（1948）

『水沢・江刺・胆沢の100年』より
アイオン台風による被害で、鶉ノ木地区が浸水。
鶉ノ木付近から赤生津方面を望む。



■解説■ 長部形の川舟

北上川で釣りや漁をする人はかつて、木製の小舟を愛用した。こと前沢地域では「長部形」と呼んだ舟を使った。名前の由来は、白鳥館対岸の平泉町長島の長部地域でよく造られたからだという。

長部形の特徴は底板の端を湾曲させて舳先にしており、レース用モーターボートのような構造。水面を滑るように進むため船脚が速い。最後の船大工が長島にいたが、すでに廃業。現物は今、一部の住民が所持しているものだけになった。（宮本升平）

前沢牛生産のさきがけ

■限られた水田

川と段丘に挟まれた白鳥館では、水田に適した平地は限られていました。そのため、集落として利用されるようになった中世から、漁労や畑作といった稲作以外の生業が必要とされるようになったと考えられます。米の他に小麦や小豆の畑作を行い、戦後の一時期には北上川の西側で麻の生産が行われていました。



白鳥館の水田

■農耕馬から肉用牛へ

白鳥館がある岩手県南地方は、馬の飼育地帯であり、馬への愛着が強い地域でした。しかし、昭和30年代になると、農業機械が普及し、耕起を担っていた農耕用の牛馬は役目を終えます。そんな中、前沢の中でもいちはやく肉用牛の肥育へ切り替えを行ったのが白鳥館でした。戦後、牛肉の需要が伸びるにつれて、それまで農耕馬がいた厩で肥育用の黒毛和牛を飼い始め、肉用に出荷していったのです。



馬用鞍 昭和30年代
白鳥館の家畜商で使われていたものです。

■広がる和牛生産の輪

昭和32、33年頃に白鳥館で最初の肥育農家が誕生し、やがて白鳥館の14戸のうちの12戸が牛の肥育を手掛けるようになります。当初は白鳥館の肥育牛は、家畜商系を通じて上野原、生母地区の肥育牛と一緒に東京へ出荷していました。昭和36年には前沢町が岡山県から40頭の繁殖雌牛を導入するなど、肥育だけでなく、繁殖でも本格的に和牛生産に取り組んでいきます。



白鳥館の肥育農家 昭和30年代 個人写真提供



白鳥館の畜舎

■全国ブランドへ

昭和40年に前沢町農協が誕生し、昭和44年には農協による東京食肉市場への肥育牛の出荷が始まります。昭和40年代になると、東京への「前沢牛」の出荷が拡大し、白鳥館でも前沢牛生産に新規参入する農家も出てくると同時に、各農家の飼育頭数も増加していきます。白鳥館でも、牛舎が新たに建設され、牛の飼育頭数が増加していきました。昭和45年から50年頃には、20～24か月間肥育を施す若齢理想肥育が肥育農家に浸透し、長期間肥育期間を設けることで肉質が向上していきました。そして、昭和63年には前沢牛の上物率が84%となり、全国規模の枝肉品評会で最高賞を受賞したこともあり、「前沢牛」が全国に知られる牛肉ブランドとなっていきました。前沢の家畜商が拓いた東京への出荷ルートがあったからこそ、高度経済成長期に農協による「前沢牛」ブランドが成功したと言えます。



鼻環通し



化粧鼻環



給餌用台車



金櫛

肥育で使用した道具



前沢牛商標

三本の曲線は北上川を、三角形は束稲山と、前沢牛が生産される豊かな自然環境を表現しています。



出荷する牛と記念撮影 2008年頃 個人写真提供

展示資料一覧

資料名称		遺跡・発掘調査	所蔵	資料名称		遺跡・発掘調査	所蔵			
北上川の要衝	北上川絵図		北上市立中央図書館	平泉の手工業生産	常滑広口壺	里遺跡	平泉町教育委員会			
	蛇の鼻を構成する輝緑岩		牛の博物館		常滑甕					
白鳥館のはじまり	縄文土器（晩期）	白鳥館遺跡3次	奥州市教育委員会	周辺との交流	かわらけ	柳之御所遺跡52次	岩手県教育委員会			
	縄文土器（後期）	白鳥館遺跡14次			渥美壺			寺ノ上経塚	奥州市教育委員会	
	石器	白鳥館遺跡2～3次			墨書かわらけ					
	弥生土器	白鳥館遺跡12～14次		流通の拠点	磁甕窯産盤	白鳥館遺跡13次	奥州市教育委員会			
	アメリカ式石鏃	白鳥館遺跡11～12次			陶磁器、かわらけ					
古代の集落	土師器・須恵器	白鳥館遺跡3次			銭	白鳥館遺跡14次				
	土鍾				製鉄炉壁					
	土師器・須恵器	白鳥館遺跡14次			線刻画のある砥石					
	鍛造剥片、湯玉、鉄滓	白鳥館遺跡2～3次			陶磁器、かわらけ					
	土師器・須恵器	白鳥館遺跡9～14次			鉄製品					
	土師器・須恵器	衣関遺跡			銅製品					
	土師器小皿	白鳥館遺跡採集		城館	花絵かわらけ	白鳥館遺跡6次		奥州市教育委員会		
	土師器片	白鳥館遺跡3次			信楽産壺	白鳥館遺跡6～7次				
	生産と流通	かわらけ			白鳥館遺跡9・10次				かわらけ	白鳥館遺跡2～7次
炉壁		陶磁器							白鳥館遺跡2～15次	
水晶製数珠玉		集落		石製品					さし銭	白鳥館遺跡3次
銅塊				鉄砲玉				白鳥館遺跡11次		
提子金具				染付皿				白鳥館遺跡3次		
鉄製品				陶磁器	白鳥館遺跡1次					
かわらけ		白鳥館遺跡8～10次		肉筆民画 稻荷鍛冶神図	奥州市前沢白鳥館		個人			
陶磁器		白鳥館遺跡9・10次		肉筆民画 鍛冶神図						
民具 ふいご		奥州市前沢		御前太鼓	奥州市前沢白鳥館	白鳥5区				
民具 提子		ほら貝	奥州市前沢白鳥館		白鳥神社					
平泉の手工業生産	埴塙	志羅山遺跡80次				平泉町教育委員会	白山神社祈禱神符	奥州市前沢白鳥館		
	銅板屑						熊野大神祈禱神符			
	棒状銅製品						三宝荒神祈禱神符			
	花瓶鋳型	志羅山遺跡60次	川と生きる	カニ用罾	奥州市前沢白鳥館		個人			
	甕	花立Ⅰ遺跡27・28次（花立窯）		ウナギ用罾						
	片口鉢			アユ用仕掛け						
	碗			前沢牛生産のさきがけ	馬用鞍		奥州市前沢白鳥館	牛の博物館		
	瓦	給餌用台車	白鳥館							
	羽口	化粧鼻環								
	鉄滓	鼻環通し								
	粘土塊	金櫛								
	かわらけ	志羅山遺跡57次	前沢牛商標		奥州市前沢					

牛の博物館郷土の企画展
白鳥館のすべて－中世の川湊から城館、そして現在－

会 期：2019年3月26日(火)～5月26日(日)
主 催：奥州市牛の博物館・奥州市世界遺産登録推進室
企画展示構成：鈴木 啓一(館長) 後藤 聡(館長補佐)
川田 啓介(主査兼席上主任学芸員) 朴沢志津江(席上主任学芸員)
森本 陽(主任学芸員) 鈴木 康平(主事)
本明 優理(学芸調査員) 佐藤 友映(学芸調査員)
渡邊 律子(学芸調査員)
及川 真紀(世界遺産登録推進室席上主任学芸員)
発 行：奥州市牛の博物館
〒029-4205 岩手県奥州市前沢字南陣場103-1
Tel 0197-56-7666 Fax 0197-56-6264
E-mail ushihaku@city.oshu.ne.jp
http://www.isop.ne.jp/atru/mhaku.html
発 行 日：平成31年3月26日

企画展示協力
岩手県教育委員会、北上市立中央図書館、平泉町教育委員会、
横手市教育委員会、名古屋市博物館、宮本升平、原子内貢、
白鳥神社、白鳥館の住民のみなさん [敬称略・順不同]
参考文献
菅野成寛(1994) 平泉出土の国産・輸入陶磁器と宋版一切経の舶載
―二代藤原基衡と院近臣― 柳之御所発掘調査報告書 第38集
351-362. 平泉町教育委員会、建設省岩手工事事務所
肉牛新報社編(1995) 前沢牛ものがたり牛と人がおりなす文化史
佐島直三郎(2001) 目で見える水沢・江刺・胆沢の100年 郷土出版社
入間田宣夫(2010) 兵たちの時代Ⅱ兵たちの生活文化 高志書院
入間田宣夫(2010) 兵たちの時代Ⅲ兵たちの極楽浄土 高志書院
八重樫忠郎(2015) 北のつわものの都平泉 新泉社
八重樫忠郎・高橋一樹編(2016) 中世武士と土器 高志書院
飯村均・室野秀文編(2017) 東北の名城を歩く北東北編 吉川弘文館
奥州市教育委員会世界遺産登録推進室(2017) 白鳥館遺跡第9次～第
15次発掘調査報告書―遺構・遺物編―
奥州市教育委員会世界遺産登録推進室(2018) 白鳥館遺跡第9次～第
15次発掘調査報告書―遺構補遺・考察・分析編―

牛の博物館友の会
会員募集中(個人会員・家族会員)
Tel 0197-56-7666 Fax 0197-56-6264

牛の博物館友の会はいつでも、どなたでも入会できます。会員には
機関紙や企画展示解説書、行事のお知らせなどをお届けします。会員
の特典として牛の博物館に無料で入館できるほか、同伴者割引もあり
ます。詳しくは牛の博物館までお問合せください。